

国木田独歩と敗者の近代

仲 島 陽 一*

一 はじめに

明治期の作家である国木田独歩(1869-1908)において、最大とは言わないにしても、最も重要な主題の一つとして、「敗者の近代」が挙げられるであろう。本稿はこの問題に関する精神的考察の試みである。なおむしろ「近代の敗者」という表現のほうがわかりやすくはあろう。しかしそれだと敗者なるものが歴史貫通的に存在して、そのうち近代における敗者に対象を限定したことになる。本稿の観点では、むしろ「敗者」がすぐれて「近代」の所産ではあるまいかという視座に立つ。それゆえ「敗者」というものを生み出した近代が何であるか、また「敗者」にとっての近代が何であるかを、国木田独歩という精神(感受者・思考者・表現者)を通じて考えること、またそれを最も重要な問題の一つとした独歩という精神を考えることをめざしたい。

独歩の作品には「敗者」が多く登場することは従来から指摘されている²⁾が、それはいくつかの種類に分けられよう。①独歩のいわゆる「山林海浜の小民」³⁾。それ自体としては「敗者」ではないが、「近代(化)」の立場に身をおくならば時勢に取り残されたという意味で「敗者」とみなされ得るというもの。②肉親を失ったり、事業において失敗したり、心身に障害を持ったり、など個人的不運により、社会的零落を被った者。「近代」にのみあるわけではないが、共同体が弱まり「自己責任」思想が強まる近代において、これらの敗者または弱者に負わされるものは、前近代とは異なる面もあろう。③恋の敗者、主として愛する女に裏切られた男。これもそれ自体は没歴史的であるが、その裏切りの原因として「近代的」な思想や風潮がからんでくる場合も多い。④性格的な弱さ、特にいわゆる「気の弱さ」から失敗したり敗北したりする者。「近代思想」は「強さの思想」である⁴⁾。⑤比較的明瞭に「近代化」の産物としての「敗者」である都市貧民。⑥日本の「近代化」への重要な転機であった幕末維新时期に理想を追って働きながら、政治のリアリズムに敗れて脱落し忘れられた者。⑦意識の上でか現実においてか、「近代化」に乗り切れない、または乗り損ねた知識人。

本稿では①④⑤を中心にみていきたい。

二 「小民」たちと近代

①を描いたものとしては「忘れえぬ人々」(1898)が代表的である。

*東洋大学国際地域学部非常勤講師

ここで具体的に描写される「近代の敗者」は、瀬戸の小島で磯を漁る男、馬子歌で車をひく阿蘇のたくましい若者、四国の浜の琵琶僧、そして溝の口の旅館の主人である。また描写はないが、北海道歌志内の鉦夫、大連湾頭の青年漁夫、番匠川の瘤ある舟子もそうである。これらはさきの分類①の「小民」に属する。ここで重要なのは彼らが問題になるのは、語り手（大津）と実際的な交渉があったからではなく、彼らは路傍の人、語り手は傍観者であったにもかかわらず、前者が後者にとっての「忘れえぬ人々」だということである。そこでその理由を語ることがこの作品の眼目であり、語り手（と作者独歩）にとって彼らは何であるかを示す。以下重要な箇所なので、長いが引用しておく。独歩自身の1891年の日記に記載された、「その後独歩がその全青春をかけて養いあるいは発見した、己が全思想、全性向が『コンデンス』されている」⁹⁾とされる感慨に由来する叙述である。

僕は今夜のような晩に独の夜更て燈に向っていると此生の孤立を感じて耐え難いほどの哀情を催して来る。その時僕の主我の角がぼきり折れて了って、何だか人懐しくなって来る。色々の古い事や友の上を考え出す。其時油然として僕の心に浮んで来るのは即ち此等の人々である。〔…〕我れと他と何の相違があるか、皆な是此生を天の一方地の一角に享けて悠々たる行路を辿り、相携えて無窮の天に帰る者ではないか、というような感が心の底から起って来て我知らず涙が頬をつたうことがある。其時は実に我もなければ他もない、ただ誰れも彼れも懐かしくって、忍ばれて来る。／僕は其時ほど心の平穩を感じることはない、其時ほど自由を感じることはない、其時ほど名利競争の俗念消えて総ての物に対する同情の念の深い時はない。／〔…〕僕は天下必ず同感の士あることと信ずる¹⁰⁾。

大津にとってこれらの「小民」はまず、「心の平穩」や「自由」を感じさせる存在である。ということは、日頃は「不穩」や「不自由」を感じているということである。それはなぜか。引用文中の言葉では、「主我の角」「名利競争の俗念」があるためである。これら¹¹⁾はすぐれて近代的な意識であると言える。そしてそれを放下したときに「平穩」「自由」を感じるとしたら、大津はこの意識に苦しめられているということである。ではこれら小民の存在がこの放下に結び付くのはなぜか。彼らがこうした「近代的自我」¹²⁾と没交渉だからであろう。それゆえ語り手にとって彼らは肯定的に——少なくとも肯定され得べきものとして——みられている。

しかし叙述を丁寧に見れば、大津はこれらの小民によって日常の自己を反省させられ、新たな生き方に気づいたというわけではない。まず大津の内発的な反省があり、「此生の孤立を感じて耐え難いほどの哀情を催して来る。」という行き詰まりから自ずから「主我の角がぼきり折れる」体験に至る。これは「此生の孤立」をもたらししているものが「主我の角」であることを意味している。それは他者を自己の「敵」でなければ利用の「手段」としかみない態度をとらせるが、この見方が捨てられれば「我もなければ他もない」懐かしさが生まれる。そのとき意識がまず向かうのは「古い事や友の上」である。古いこととはこども時代の家族や仲間であろう。そしてここでさらに、「其時油然として」これらの小民が浮かんでくると言うのである。理屈で言えば、家族や友人は確かに「主我的」でないとしても、それは大津に対してであって、彼らの人生そのものが主我的でないとは限らない。そこで「忘れて叶うまじき人」ではあるかかもしれないが、「忘れえぬ人」としては不純で

ある。その意味で大津にもう一つの人生を啓示するには不足であって、ここに小民たちの存在が意義付けられる。——彼らが「主我」を脱しているとするのは大津の主観的願望に過ぎないとするのは、それ自体まさに「近代的」批評の言であろうが、その当否は論ずるに及ぶまい。大津がそう信じたということでは十分である。そして人はすべて主我的であるとしか思えない者と、そうでないという少なくとも確信を持つ者がいること、両者の間では人間観などに大きな開きが生じることを指摘すれば、十分であろう。

ここで一つの語彙にこだわってみたい。「主我」がそれである。あまりみない語である。また漢語として昔からあったとも思えず、明治期の造語の一つと思われる。1881年の『哲学字彙』では self-regarding act を「主我発動」としている。独歩は既に作品「おとづれ」（1997）でも「順なるやうにて却つて主我の念強きは女の性⁹⁾」などを使っているが、どこに由来するのか。大胆に推測すれば、徳富蘇峰の存在を私は重くみたい。蘇峰は『将来ノ日本』（1887）で「人ハ主我的ノ動物ナリ」¹⁰⁾と断じている。

言うまでもなく独歩に対して蘇峰は公私ともに大きな存在であり、影響や関係についてはいろいろな研究がなされている。ここで問題にしている独歩の「小民」への愛についても、蘇峰の「平民主義の『愛民』の思想」を継承したものという見地¹¹⁾もある。ただ、両者の連続性と相違点について、従来は主に社会的性格から論じられてきたが、私は倫理思想の面についても着目する必要があると考える。初期の蘇峰はマンチェスター派の社会理論に依拠し、人間は自分個人の利益を図るのが本性という人間観に立ち、そしてその私欲を肯定する功利主義的徳を説いていた。「士族民権」期の活動家たちが儒家的「志士仁人」意識に西洋民主主義思想を結合したのに対して、より「純西洋的」「純近代的」な思想として、豪農や新興市民層をひきつけたイデオロギーであった。独歩は蘇峰の中のこうした個人主義的・功利主義的倫理に対しては、おそらくはじめからなじめなかったであろうし、それを乗り越える地平を、実生活でも文芸作品でも求めていたのではなかろうか。

そこで、否定されるべき「主我」「名利競争」に対する観念として出てくるのが、「総ての物に対する同情の念」である。近代における「同情」の語は現代における語感とは異なること¹²⁾が注意されなければならないが、ここでは「我もなければ他もない」など前後の文脈によって、意味するところは了解されよう。ただここで私が考えてみたいのは、この観念が王陽明の「天地万物一体の仁」¹³⁾と重なるように思われることである。王陽明は独歩が親しんだ作家の一人である。もっとも独歩が王陽明のこの語を使っていない以上、その影響と確言することはできない。しかし万物一体の仁ということは誰かに学んで知るといふより自得するものであり、まさにそうした各人良知の働きととらえるのが王陽明自身の見地でもあった。してみると逆に、独歩の中のこうした思想あるいはむしろ感性が、王陽明への評価ないし同感の条件として存在していた、と言うべきなのかもしれない。芦谷信和氏は独歩への王陽明の影響という貴重な研究¹⁴⁾を行っており、詳しいものであるだけに、この根本思想の一つに関して言及がないのは寂しいような気もして問題提起を試みたのだが、あるいは牽強であろうか。

いずれにしても、ここには独歩の、誰から教わったとか影響を受けたとかいう以前の、いわば魂

の質が表れたものと言えよう。それがたとえば蘇峰に対しても、その「平民主義」という点への同感ないし評価はもたらしたものであろう。

ところでこうした主客無差別万物一体の境地が独歩の、——さしあたりは大津の——魂の基調であり故郷であるなら、彼は帰去来を宣言するのであるか。しかしそれは厳密には不可能である¹⁵⁾。イエスも幼子のごとかれと説き、儒家は放心を求めよと教え、ワーズワースはこどもはおとなの父であると歌う。独歩はこどもの素朴さや純真さを常に愛しまた敬ったが、おとながそれを取り戻し得るとは思わず、また実在の地方に文明に汚れぬ桃源郷があるとは思わなかった。それゆえ大津と彼の「忘れえぬ人々」との間には画然たる壁がある。この作品の最後の一句はそれを伝えて重い。画家の秋山も大津の同類であるから、これら素朴にして敬うべき小民への感動を共にできても、その小民の一人にはなれない¹⁶⁾。

してみるとこの作品では、二種類の「近代の敗者」がいることになる。近代の名利競争から没交渉の小民とともに、主我や俗念に中途半端な疚しさを抱く悩める知識人とである。後者の大津や秋山が敗者であるのはなぜか。客観的には、うだつのあがらぬ文士や画家であるからであろう。しかし彼らは若い。より野心的な芸術家に設定すれば、あるいはより前向きな話に展開すれば、実際の作品のような、既に敗者たる雰囲気を漂わせはしないであろう。すなわち彼らは、その分野での「勝者」たちを棚卸しするほどには野心に未練がありつつも、小民たちを忘れ置き去りにして¹⁷⁾勝ち組へと向かうほどの蛮勇もない、いわば気の弱い人々である。そしてこの気の弱さこそ、独歩が特に取り上げたいと思った性格の一つであると、私は考える。気の弱い人はそもそも人間関係における敗者になりがちであるが、特に名利競争の近代においては、社会的境遇としての敗者に導きやすい一因ともなる。

三 小心者と近代

「酒中日記」(1902)の主人公大河などは、この「気の弱さ」ということを特に全面に出した作品である。気が弱いということは競争に向かないということであるから、競争の時代である近代においては敗者となってしまう。大河の場合は「敗者」というにとどまらず、親の犯罪や妻の自殺を阻止できずに職や名を捨てて逃亡することになる。

芦谷信和氏は大河の気の弱さを、「性格的欠陥」「短所」として、この作品を「悲劇」として成立させる一因ととらえている。これに対し秋山公男氏は、独歩がそれを「欠陥」「短所」と「みているとは思えない」と批判している¹⁸⁾。この点で私は秋山氏に賛成する。芦谷氏は「悲劇」のあり方の反省から、この作品や独歩の他の作品を興味深く分析しているが、ここではやや自らの図式にあてはめる弊害もあるように思われる。独歩としては、(芦谷氏もそこまでは言っていないが)「悲劇」をつくるため「性格的欠陥」を設定したというより、まず気の弱い男というものに関心があり、それを描く上でその性格が陥りかねない悲劇的運命(とある種の救済)を描いた、というのが実際のところではあるまいか。その面では私は秋山氏が、「人間の本性を弱さにみる、作者の人間認識が大河

に典型化され、具象化された」¹⁹⁾という見解にも、そのままは賛同できない。「欠点」ではないにしても気の弱さは性格の一つであって「人間の本性」ではなく、気の強い人も弱い人もいるだろう。ただ言えることは、独歩が気の弱い人間のほうに大きな関心と「同情」とを持っていた、ということである²⁰⁾。秋山氏がこの作品に「前近代の視点からする近代批判のテーゼがそこに内蔵されている」²¹⁾と指摘しているのは正しい。ただそれを——「忘れえぬ人々」における小民に対応する——馬島というトポスに求めるだけでなく、「気が弱い」という——それ自体は欠点ではない——性格が近代では悲劇の要因になるという筋立て（ミュース）にも求めるべきであろう。逆に言えば、気が強いこと自体も欠陥ではないにしても、その性格を罪悪の積極的遂行者にしやすい社会的要因に、独歩は気づいている。「名利競争」の極北は戦争であるが、大河の母と妹とを墮落させたものは「日清戦争」であったと、実在の歴史に言及した設定になっている。そして明治ではまだ可能であったのかと思わせるような「痛烈な軍人批判」²²⁾がある。「気が弱い」性格が持つ積極的意義を認め損なったことは残念であるとしても、芦谷氏がこの作品において「運命劇的要素を切り捨てて、境遇悲劇的要素乃至社会悲劇的要素」をより重視したならば「すぐれたリアリズム作品として成立し得たであろう」²³⁾と感想を抱くのは、もっともな面がある。

四 都市貧民と近代

晩年の独歩は、近代化のただ中の敗者とも言うべき都市貧民の生死を、より写實的に描いていく。

「窮死」（1907）の主人公文公は、親兄弟も知らない浮浪少年あがりで、三十過ぎまで土方などいろいろな仕事でなんとか食いつないできたが、この冬肺を病んでいきづまった。安宿には借りがたまって知り合いの土方弁公のところへなんとか休ませてもらった。「弁公親子は或親分に属して市の埋立工場の土方を稼いで居たのである。弁公は堀を埋る組、親父は下水用の土管を埋る為めの深い溝を掘る組。」²⁴⁾近代「東京市」成立の底辺の労働者である。ところが弁公の父が翌日喧嘩で殺されてしまい、行き所のなくなった文公はついに「如何にも斯うにもやりきれなくって」²⁵⁾新宿赤羽間の鉄道に飛び込んで最期を遂げた。

——末尾に「やりきれなくって」を反復したところに、この敗者に対する独歩の同情が表われているが、全体的な書き方としては筆者の感情を抑えた写實的な描写である。自然主義的で「救いのない」話とも言えるが、弁公の親父にみられるような助け合いの気持ちが、読者を暖めるかもしれない。（同時に、庶民同士の善意では解決できないものとして社会問題へのより深い認識を示している²⁶⁾。）

「竹の木戸」（1908）の場所は郊外であるが、もはや「武蔵野」（1898）の郊外よりも今私達の思う郊外に近づいており、その大庭家の主人は京橋に通勤する事務員である。その隣の「物置同然の小屋」に住んでいる植木屋磯吉と女房お源が貧しさからついに盗みをはたらいて露見し、お源は自殺する。

一般に独歩は構成の巧みな作家とされているが、この作品は特にその面で玄人筋の評価の高いも

のである。しかし素人読者として受容すれば、これは何を書いたものと考えたらよいか。一見すると貧しさの悲劇のようである。またその要素があることは否定できないが、どうもそれだけでは割り切れない。末尾の一句などにもそれが感じられる。独歩は小説の結び方にはかなり工夫したようで、実際きわめて効果的なものも多い。ところでこの作の主眼が社会悲劇的側面にあるなら、結び前の、竹の木戸が壊されたくだりて筆をとめるほうが完成感が強いであろう。しかし独歩は更に次の一句を加えた。「それから二月程経と磯吉はお源と同年輩の女を女房に持って、渋谷村に住んでいたが、矢張豚小屋同然の住宅であった。」²⁷⁾——してみると作者の第一の関心は磯吉の性格にあるのであろうか。

この疑問を持って最後の小説「二老人」(1908)を読んでみる。第一の老人石井は一年前ある官職をやめて恩給月二五円をもらう境遇になった。妻と娘二人合わせて一家四人の生活には苦しく、親族知人などが隠居仕事を勧めるが、頑としてきかないでいる。彼と旧知の老人河田は、性格(その一つは気の弱さ)のためか環境のためか不遇な状況にあり、此頃ある団体の集金係をしているのだが、ふとしたことからつかいこんでしまい、露見を恐れている。

「竹の木戸」と違って劇的構成はない。それだけに作者の関心のありかが問われるが、どうもこの二老人の性格ということになりそうである。してみると「竹の木戸」でも、作者は磯吉の性格に関心があったとしてもおかしくない。これらの性格——少なくともそれは時勢に乗って成功するには不適當と言える——に対し、独歩は同情的なのか、批判的なのか。強くどちらかとは言い難い。そして肯定否定するという価値判断よりも、これらの性格を持った人間の存在や、彼らがたどる運命ということに、作者の関心はあるように思われる。この意味で彼らに対する独歩の見方は、明らかに「小民」に対するものとは異なる。この違いをどう考えるべきであろうか。

第一に思いつくのは、年とともに独歩の書き方が変わったということである。すなわち初期には対象への思い入れが強く、またそれをしばしば美化して描く傾向があるのに対して、後期になるほど、対象と距離をとり、冷静に描写しているということである。この意味においては、ロマン主義的傾向から自然主義的傾向に向かったとする評は不当とは言えまい。しかし多くの作家が——作家以外の人々も——若いときほど理想主義的で年とともに現実主義的になるのはありがちなことであり、この意味で独歩においても「主義」の移行というより現実認識と表現の深まりをみたほうが、より適切かもしれない。

第二にこの違いでは、時期的変化よりも対象そのものの違いに目を向けるべきかもしれない。すなわち同じ貧しい人々でも、「忘れえぬ」小民たちは、日々の労働によって疾しからぬ生活を営んでおり、そこに独歩の共感があると考えられる。これに対し、「竹の木戸」の磯吉はある種の性格破綻者である。「二老人」の石井の、つましく生活できればそれ以上もう苦労したくない、という言い分は一見同情できそうであり、むしろ欲張って働こうとする心への独歩の批判なのかと思いにさえなるが、やはり彼にとって労働の意義は単なる生計の資ではないと考えれば、彼が共感する人生観ではなからう。もう一人の老人河田は働いているものの、使い込みをしたまま隠しているという道徳的弱さを持っている。逆に、これら後期の作同様に都市貧民が描かれている「二少女」(1898)

では、はっきり共感的で、労働・思いやり・知恵によって、前向きで暖かみのある描き方になっている。また性格破綻的で社会秩序に適応できなくなった「敗者」としても、「源おぢ」（1997）での主人公や紀州、あるいは「春の鳥」（1904）の少年らは、先天的な障害やその後の非運という、本人を責められない原因によるので、作者は同情的に描けるが、磯吉や石井や河田は何らかの意味で当人にも欠点があるので、作者は単純に同情しないのではなかろうか。（ただし彼らを単純な「悪人」として造形しているのではないし、概して独歩は「悪人」も100%当人が悪いのではなく、境遇にもよるとみていると思われる。）

五 おわりに

独歩が文芸を以て自らの道と思った日の志（注3）を、もう一度みてみよう。「愛と誠と労働の真理を吾が能くするだけ世に教ゆるを得ば吾が望み足れり。」²⁸⁾——愛と誠と労働、これは近代的理想と言える²⁹⁾。すなわち独歩は「反・近代主義」者であるとしても、「反近代・主義」者ではない。無論この「近代的」理想は、近代の一面であり、他の反面として言わば、欲望（野心・虚栄）と自我と競争の近代があり、これは独歩が否定しようとしたものである。独歩が勝者よりも敗者により大きな関心と同情を持ったのも、このことと関係しよう。すなわち「勝者」は多く主我的な人であり、競争を通じて野心を遂げた者の謂であるからである³⁰⁾。——それでいいではないか、と開き直られるなら、それはもはや魂の質とも言うべき根源的差異である。独歩はそのような「勝者」は好めない人間だったのである。

そして独歩が「敗者」の中でも特に心を動かしているように思われるのは、気の小ささや心の優しさも一因となって、「近代の勝者」たちとは没交渉の世界の一隅で淡々と生きる、あるいは近代化に取り残されて清く貧しく生きる、あるいは「近代」ないし「勝者」に裏切られたり犠牲にされたりして悩み苦しんで生きる（死ぬ）人々である。

ではそれらの人々にとって、独歩の作品は何なのであろうか。「日の出」（1903）「非凡なる凡人」（1903）「馬上の友」（1903）「二少女」のような前向きの作品³¹⁾は、まばゆいばかりの「成功」ではないが、——かといって超世間的な理想でもなく、——「愛と誠と労働」の中の素朴な希望で励ますであろう。「置土産」（1900）は剽軽そうな語り口から始まるが、最後はしんみりさせる。気が小さくまた運のない善良な若者への作者の同情が感じられて深い印象を残す。「少年の悲哀」（1902）は更に悲しい話かもしれない。ワーズワスの言う“the still, sad music of humanity”、川端康成の言う「美しくて悲しいもの」の見本のような作品である。遊女を題材にしても、西鶴と芭蕉とではその見方描き方が対照的であり、単なる世態風俗の描写にとどまらず人情の深い真実をとらえた芭蕉は、「まこと実ありて悲しびを添ふる」文芸を志した³²⁾が、独歩の文芸もこれに連なっている。

確かに独歩は、それらの「敗者」の背景にある「近代」という時代把握が十分にあったとは言えず、したがって彼らへの同情や励ましはあっても、その社会的本質について具体的認識を深めるものではない、という批判は間違いではあるまい。しかしそうしたないものねだりによって独歩の価

値を否定するならば誤りであろう。これらの敗者に独歩が心を動かし、暖かい心と鋭い観察眼で描いたことにより、結果として近代批判になっている。たとえば「富岡先生」(1902)などは明治維新について、伊藤や山縣などとは違った側から考えさせてくれよう。「置土産」「酒中日記」「号外」(1906)などは、明治の外征の——「愛弟通信」(1894-95)では書き得なかった——庶民にとっての苦い意味合いを示すであろう。そして何より彼の諸作品は、「名利競争」の時代としての近代を告発するであろう。

もう一度確認するが、独歩は反近代復古主義者ではない。「愛と誠と労働」という近代的理想を持ちつつ、近代の人間疎外と闘おうとしている。後者の、欲望(インセンティブ)と自我(自己責任)と競争(市場原理とカジノ資本主義)が肯定され礼讃され、「愛と誠と労働」がそのためにおしつぶされている近年の日本³³⁾においても、独歩の作品は心ある人々を感動させざるを得まい。

凡例

- 学習研究社版『定本 国木田独歩全集』(1978増訂版)は『全集』と略し、巻数を丸囲みの数字で示した。
- 引用文中の漢字はすべて新字に直した。また原文が口語である場合には現代仮名遣いに直した。

注

- 1) 他の重要主題として、「驚異」の問題や、「シンセリティ」の問題などが挙げられよう。
- 2) 早い例として、『新潮』の独歩追悼号における小山内薫の指摘、「淋しい人とか世に捨てられた人とか時代に遅れた人とかが多い。独歩が斯かる人物を好んで描いたのは」云々、などが挙げられる。(全集、⑩159頁による。)
- 3) 「昨日は吾に取りて、極めて主要の夜なりけり。昨夜吾は断然文学を以て世に立たんことを決心せり。」とある、1893年3月21日付けの日記において彼は言う、「人類真の歴史は山林海浜の小民に問へ。」「欺かざるの記」全集⑥70-71頁
- 4) この問題については拙稿「ルソーにおける『強さ』と『弱さ』の倫理」(『倫理学年報』第48集、日本倫理学会、1999)を参照されたい。
- 5) 滝藤満義『国木田独歩論』塙書房、1986、148頁
- 6) 「忘れえぬ人々」全集③120-21頁
- 7) この二つを等置する理解について、芦谷信和『独歩文学の基調』桜楓社、1989、289,291頁。これに私も賛成である。
- 8) 「近代的自我」については、拙著(永井・福山・長島編)『物象化と近代主体』(『近代的自我と社会倫理思想』)創風社、1991、を参照されたい。
- 9) 「おとづれ」全集③51頁
- 10) 『明治文学全集、34、徳富蘇峰集』筑摩書房、1974、77頁。なお独歩は蘇峰自身について「大主我的なり」と評している(『人物批判』全集⑨159頁)。
- 11) 芦谷信和、前掲書、46頁
- 12) 拙稿「共感をめぐる日本語について」『桐(文芸と教育)』第10号、大東文化大学第一高校、1992、参照
- 13) 拙稿「儒家思想における<共感>の問題」『国際地域学研究』第3号、東洋大学国際地域学部、2000、参照
- 14) 芦谷信和『国木田独歩——比較文学的研究——』和泉書院、1982
- 15) 言うまでもなく「帰去来」は陶淵明の詩であり、これは独歩が好んだ詩人の一人であるが、またこれも独歩と関係の深い宮崎湖処子とが共にする小説の主題でもある。この関係については、北野昭彦『宮崎湖処子 国木田独歩の詩と小説』和泉書院、1993、参照。また独歩における「帰郷」の不可能性については、滝藤満義「さ

まざまな帰郷」(前掲書所収) 参照。

- 16) 「秋山ではなかった」理由として、秋山と大津の同類性を挙げる山田博光氏の見解(『日本近代文学大系、10』角川書店、1970の注釈)、また秋山のこの作品における意義として、大津に対する「同感の士」を代表するとする滝藤氏の見解(前掲書、150頁)に私も賛同したい。
- 17) 近代化の中での「置き去りにされる者」が夏目漱石において重要な主題の一つであったとする土居健郎『漱石文学における「甘え」の研究』はこの意味で興味深い。
- 18) 秋山公男『近代文学 弱性の形象』翰林書房、1999、37頁
- 19) 同書、37頁
- 20) 独歩は大河の「性格に配するに半ば自己の性格を以てせり」と語っている。(『病牀録』全集⑨80頁)
- 21) 秋山公男、前掲書、53頁
- 22) 芦谷信和、前掲書、364頁
- 23) 同書、401頁
- 24) 「窮死」全集④36頁
- 25) 同書、38、39頁
- 26) 北野昭彦『国木田独歩』(第八章「窮死」) 桜楓社、1981
- 27) 「竹の木戸」全集④153頁
- 28) 「欺かざるの記」全集⑥70頁
- 29) これはプロテスタンティズム的理想とも言えよう。伊藤久男『国木田独歩』近代文芸社、2001、32頁参照。しかしこの「エートス」は、伊藤氏も指摘するように、原罪や贖罪といったキリスト教の深部での受容とは結び付いていない。ただこれを「欠如」としてよりも、王陽明や吉田松陰のような東洋思想の媒介も経た、選択的で主体的な(プロテスタンティズムの)受容としてもとらえられよう。
- 30) 独歩の作品で最も早く公表されたものの一つは、「アンビション」への批判であった(全集①)。
- 31) これらの作品には、初期の蘇峰とも共通する、「力作型」経済人の形象をみることもできよう。この概念と史的位位置付けに関して、内田義彦『日本資本主義の思想像』(「二 知識青年の諸類型」) 岩波書店、1967、参照。
- 32) 拙稿「日本文芸における〈あはれ〉と〈あはれみ〉」『桐(文芸と教育)』第12号、大東文化大学第一高校、1995、参照
- 33) たとえば『毎日新聞』西部学芸課の福岡賢正氏は、(法に基づいて)「個人が自由に私利私欲を追求」する社会体系を「近代」と等置し、かつ前近代的価値観と対置して肯定している(同紙、2003年12月21日「発信箱：サムライと自爆テロ」)が、こうした論調が増えているように思われる。確かにこれは「近代」の一側面であるが、他の近代的理念、たとえば「人格の尊厳」は形骸化されやすく、「平等」はむしろ非難されやすく、「友愛」はまともに扱われていないと言えるのではなかろうか。

KUNIKIDA Doppo and Losers in Modern Society

Yoichi NAKAJIMA

KUNIKIDA Doppo, Japanese novelist in Meiji era, picked up various losers in his many works.

He esteemed and sympathized with the common people who live detachedly from the power and vanity of the modern world. On the men of tender but weak character subject to fail in modern competitive society he took compassion. He sketched realistically the miserable life and death of poor people in the modernizing Japan. In this way he brought into relief inhuman negative figures of the modern society.

Not being a feudal reactionary, however, he approved some modern ideals: humanity, sincerity, industry at the same time. This made his critique more persuasive and lasting.

With the still, sad music of humanity, he told us the tragedies of losers in modern society.